

なごや 戦災復興の物語

…名古屋の街はこうしてつくられた…

池田 誠一

【4】墓地移転…平和公園が生んだもの

1 成否のカギ

戦災復興事業の区域には300近い寺院がありました。昭和38年、毎日新聞に連載された「新しい鯨」という名古屋の戦災復興を描いた小説があります。その中で、赴任直後の田淵氏は「名古屋市内にはむやみに寺が多く、従って焼跡はどこを見ても墓ばかり」と感想をもらしています(文献①)。敗戦直後の街には焼け残った墓石が到る所に目立ったようです

(図1)。氏には、これを何とかしなければ良い復興計画をつくれないという思いがありました。幹線道路等を、その墓地を避けて計画することは不可能だったからです。

ところが、墓地の移転は家屋よりも難しいというのもよく分ったことでした。墓地は長い歴史の上であり、また寺と地域、寺と墓地とは共にあるというのが通常の理解でした。

ここで、それを、「全部やろう」「一括でやろう」という思いが出てこなければ、名古屋

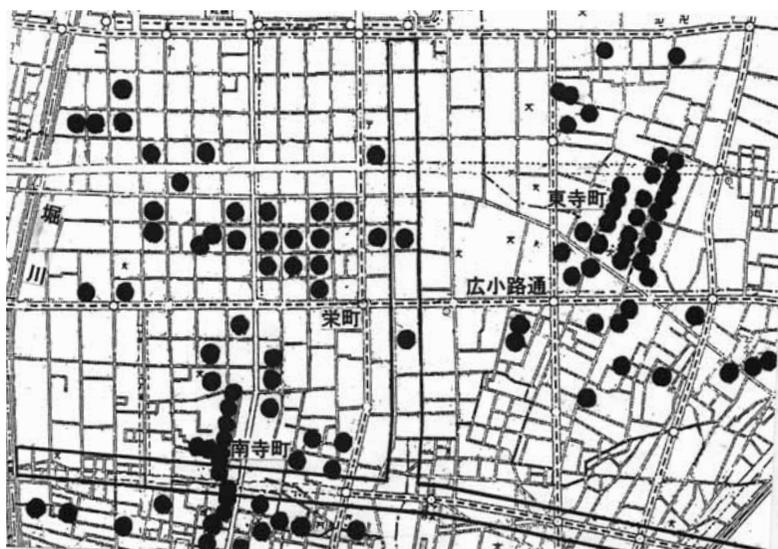


図1 終戦のころの都心の寺院。これらの寺の付近に墓地が点在していた(文献③に加筆)

の戦災復興は、おそらく大きく遅れ、規模も縮小したものになっていたでしょう。名古屋の戦災復興事業の成否のカギになったのは、この墓地の移転だったのです。今回は、復興計画の前提になった墓地の集団移転という事業が、なぜ可能になり、それが何を意味するのかを考えてみたいと思います。

2 キーパーソン

これまで、江戸の大火や関東大震災の後などに墓地の集団移転が企てられましたが、いずれも失敗の連続でした。ほとんど不可能と思われたものを、現実可能にしたのは何だったのでしょうか。

(1) わずか1ヶ月

外部に出た墓地移転の経過をたどってみると意外なことに気が付きます。まず20年の11月9日に各宗派を集め、市としては墓地を郊外一箇所に集めたい旨の説明をしました。この時は寺側は大反対で、取り付く島もなかったようです。

ところが、ひと月も経たない12月8日、寺側の代表者から市に「陳情書」が出されているのです。もちろん陳情といいつつ中身は条件書です。中には、①戦災を問わず全寺院とすること、②敷地は3割増を与えること、③費用はすべて県、市が負担すること、などの条件でした。これらは大変な条件には違いますが、よく見れば反対闘争ではなく条件闘争になっているのです。この1ヶ月に何が起こったのでしょうか。

(2) 怪僧？高間宗道氏

最初に紹介した「新しい鯨」の中に、その経過が記されています。そこにはキーパーソンになった高間宗道氏がいました。

氏は、学生中に乾徳寺の住職を継ぎました。乾徳寺は、曹洞宗でも高い寺格をもち、高間氏はまだ31歳でしたが、宗の県の代表をしていました。その人が、11月市の説明を聞いた後で移転構想に興味を持ち、仏教界を条件闘

争へと導いたのです。そこには、宗派の代表で決したこと、不可能なのだから「どうだ、この条件ならやってみろ」という形にしようと周囲を説得したこと、さらには細部の一任を取りつけ即座に進めたことなど、鋭い戦略がありました。氏には、寺と墓地との切り離しは寺の死活問題ではあるが、いつまでもそこにしがみついて居てはいけないという考えがあったのです。そして陳情書になりました。

高間氏は、この構想を取りまとめた後も、難しい墓の移転事業を、寺側のまとめ役として実施にも関わり、まさに名古屋の戦災復興の恩人になったのです。

(3) 平和公園の地

さて、市には移転先をどうするかという問題がありました。寺側からも、公園方式で交通の便のよい所と条件が出されていました。面積は公園部分も含めると50畝を越えます。

目がつけられていたのは、田淵氏が毎朝散歩していたという覚王山から東、市域境の軍の演習地でした。そこは少し荒れてはいましたが、なだらかな丘陵地で、交通の便も市電の東山公園停から程近い土地でした。

しかし市には油断がありました。その国有地は食糧増産のため農地営団の使用が決まっていたのです。それを逆転するため、22年の2月、田淵氏は土地使用の許認可権を持っていた桑原愛知県知事を現地に案内し、墓地移転の必要性を説きました(文献2)。こうして、平和公園への墓地移転事業は動き出すことが出来たのです。

3 墓地移転の先と跡

… 平和公園と東寺町 …

それでは、復興計画の前提だったといえる墓地移転の史跡を訪ねてみましょう。少し離れていますが、移転先となった平和公園と、移転跡でも顕著だった東の寺町を歩いてみます。
(平和公園)

地下鉄の自由ヶ丘駅からバスで光が丘に行

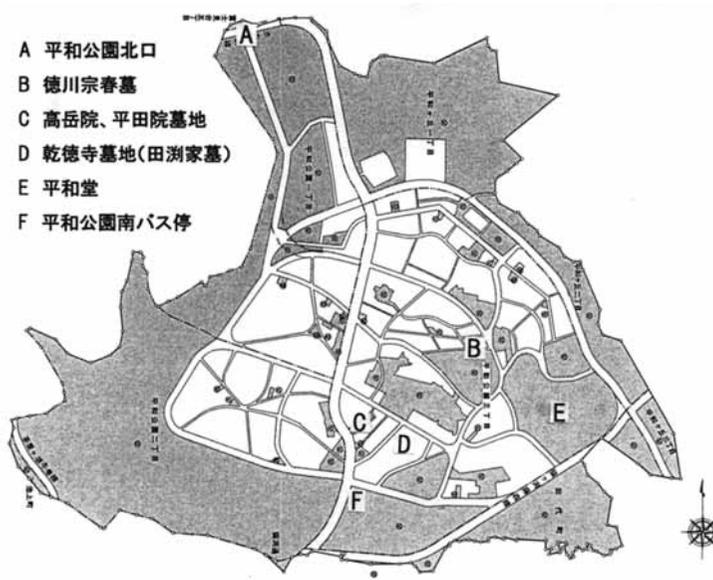


図2 平和公園になった区画整理の千種4地区。白地のところが墓地

きます。そこに平和公園の北口があります(図2)。遊歩道を南に下りかけると、左に高い



アクアタワーからながめた平和公園



遊歩道を下ると180° 墓地が広がる

塔が見えます。アクアタワーと名付けられた給水塔で、40mの高さに展望台があり、土・日曜には平和公園が一望できます。

遊歩道を下りきると、前面が開け墓苑が見渡せます。真っすぐ車道を進むと、両側には各寺院の墓地が展開します。坂を上り、左からの車道が合流する付近、右の林の手前の小道を少し下ると、高い石碑が目につきます。案内道標で7代藩主徳川宗春の墓であることがわかります。將軍吉宗の向

こうを張って怒りをかい、蟄居の上、墓は死後何10年も金網で覆われていました。小道を下り車道を西に向かうとバス通りです。左に曲がり、坂を上ると上りきった辺りから左に、高岳院、平田院と尾張藩の始めの頃の寺の墓地が続きます。

坂を下って信号交差点の一本手前を左に入ると、少し先の右側に乾徳寺の墓地があります。高間氏はこの寺の15代の住職で平成元年に亡くなりました。墓地の中央にその墓があります。そして、そこから少し上った一番上の列、右側に高間氏の立てた寺の石柱の横に、田淵氏の眠る墓がありました。



建中寺墓地からの墓園。中央の高い石碑が七代藩主宗春の墓



平和堂に近く、墓苑を見下す田淵氏の墓



平和堂。田淵氏は自らの退職金の多くをこの建設費に寄附した

田淵氏が最後までこだわったという平和堂に行くために、直ぐの道路を右に、そして見え始めた平和堂に向かって左、右、左、右と進んで丘を上ります。平和堂は信心深い田淵氏の念願でした。墓の移転や戦争・戦災で亡くなった人の供養を意味して「平和公園」と呼んだのでしょうか。全てを寄附でつくり上げた堂はそのシンボルだったといえます。

今は桜につつまれる正面の階段を下り、広い道を右に、途中のY字路を右に選ぶと平和公園南のバス停があり、星ヶ丘行が出ます。

〈東寺町〉

さて、墓地移転の跡はどうなったのでしょうか。星ヶ丘から地下鉄に乗り新栄町で下車します。駅の北側の出口を出ると50号道路です。ここは寺町の東の端でした(図3)。通りを渡り西に、一本目を北に曲がります。東西南北に区切られた都心部の道路にあって、斜めの道路は目に付きます。この通りが斜めになった理由は、元々築城時にこの寺町が、斜めに通る岡崎街道(現飯田街道)の両側に作られたためです。街道の南北に曹洞宗と日蓮宗の寺が通りに沿って並べられました。



図3 現在の東寺町付近。枠内は寺の敷地と考えられる所。区画線は江戸時代の寺の想定した区画



現在の法華寺町筋。飲食店と駐車場が目立つ

一本目を北に歩くと、寺町のイメージはありません。そして東西と南北の広い道が昔の寺の区画を壊しています。2本北に行ったところで左に曲がります。次の角から南を見るとY字路になり、左の広い道が区画整理で出来た道、右が昔の寺町の道です。しかし寺町の道を進んでも、寺はポツン、ポツンです。

寺と寺の間を埋めているのは飲食店と駐車場、それに事務所ビルです。実はこの空間は多くの墓地があったと考えられる所です。墓地の跡には住宅系は好まれず、人を呼ぶということで水商売系に活用されました。この地域にファッションホテルが目立つのもそのためだといいます。

飯田街道で東に曲がります。寺の跡に出来た錦通を渡り広小路通を東に、広い幹線道路(国道153号)を渡ると少し先に高層のビルがあります。ここが高間氏の雲竜山乾徳寺です。山号がビルの名になりました。肝心の寺はビルの通路を南に入った左にあり、戦災をまぬ



ホテルにはさまれてしまった寺。ここも墓地の跡？



高間氏の雲竜山乾徳寺。
すぐ前まで高層ビルの足がのびている

がれたという本堂があります。

4 墓地移転の意味

墓地の集団移転は名古屋の街に何を残したのでしょうか。まず道路や公園を墓地の制約なしに配置できたことでしょうか。が、田淵氏はこれに加えて土地の減歩率を少なくする事が出来たことを挙げています。逆にみればそれだけ多くの公共用地を確保できたことにもなります。墓地は20%近くになり、これは久屋大通一本の面積に相当するのです。

市の戦災復興誌では、衛生上の観点とか、景観の向上を加えています。が、結果的にみると大きかったのは墓地移転の早期決定が復興事業の促進につながったことではないでしょうか。昭和24年ドッジラインで全国の戦災復興事業が見直され、規模縮小や補助削減になりました。名古屋は事業が進捗していたため、影響が少なかったのです。

最近の墓地は墓苑と呼び、環境のいい所に公園形式で作られることが主流になりつつあります。戦災直後に、その姿を見通した先見性にも、改めて頭が下がりました。

〈主な参考文献〉

- ①村松喬『新しい鯨 日本人の記録』(1964、毎日新聞社)
- ②田淵寿郎『或る土木技師の半自叙伝』(1962、中部経済連合会)
- ③伊藤徳男『名古屋の街 戦災復興の記録』(1988、中日新聞本社)